浪江のこころ通信

・第118号・

平成23年３月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年３月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散して避難生活を続けています。町を取り巻く状況が徐々に変化する中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

〝浪江のこころプロジェクト〟は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信（※1）」を通してお届けし、皆さんの思いや暮らしぶりを発信・共有しようとするものです。

一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム（※2）が中心となり、全国各地のＮＰＯ、大学などの皆さんが取材を進め、浪江町と連携し「浪江のこころ通信」を編集・発行しています。

※１ 浪江のこころ通信は、町民の皆さんがお話しした「こころ」を伝えることを大切にするため、取材者が聞き取ってまとめた原稿をほぼ原文のままで掲載しています。

※２ 一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、大学、ＮＰＯ、企業、経済団体、行政などが連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第118号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒979－1592
浪江町大字幾世橋字六反田7番地2
「浪江のこころ通信」宛て
FAX 0240(34)4593

ふくしま花フェスプロジェクト

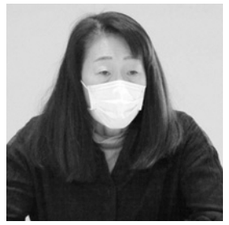
特定非営利活動法人Jin 代表　**清水裕香里**さん（幾世橋）
かつらお胡蝶蘭合同会社 業務執行役　**杉下　博澄**さん（葛尾村）
Smile farm 代表　**谷口　豪樹**さん（川俣町）
fuku farming flowers 代表　**福塚裕美子**さん（川内村）

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ　古山・松田
取材日：２月５日

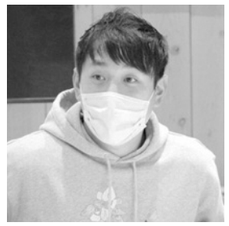
花を通してふるさとの復興を目指す、４人の挑戦

今回は、浪江町と隣り合う町村の方々もお迎えしてのグループインタビューになりました。いずれも花に関わる仕事を通じて、震災やコロナ禍を超えて新たな地域産業を創ろうとする若い世代の人たちです。

それぞれのフィールドは、生まれ育ったふるさとであったり、新たなふるさとになったりと様々ですが、その地域で新たな仕事を介して復興を願う思いや今の状況、そして地域や事業へのこれからの抱負などについて、お話を伺いました。


清水さん

杉下さん


谷口さん

福塚さん

◆東日本大震災・福島原発事故が起きた時は、どこで何をされていましたか

福塚さん　大阪府貝塚市生まれの私は、東京で3年間仕事をしたらドイツに学びに行こうという目標を持って花屋で園芸と花の仕事を始め、その1年目にあの震災が起きました。

園芸の同僚であり、大切な友人のふるさとが川内村で、震災の年（平成23年）の8月に村を訪れた時、荒れ果てた田畑や人のいない村を見て悲しむ姿を見て、役に立ちたいと思いました。そこで、花の仕事からいったん離れ、翌年5月から村に移住して米作りや畑仕事、復興イベントなどを手伝いました。

清水さん　あの時は、勤務するNPO法人Jinのデイサービスがまもなく終わるという時間帯で、揺れが収まった後、利用者さんを送り届けました。翌朝、原発事故が起き、利用者と共に郡山市へ移動したりしました。Jinが県北方部3か所に事務所を置き、私は二本松市勤務だったので、避難先の福島市から通勤しました。

平成25年に町内への立ち入りができるようになり、まず野菜を作り始めましたが、モニタリングの結果で出荷できなくなりました。翌春（平成26年）から、町の勧めもあって、トルコギキョウやリンドウの栽培を始めました。

杉下さん　出身は葛尾村ですが、当時は田村市船引町にある遊技場のマネージャーでした。シフト明けで町内のアパートに居て地震に遭いました。混乱していた隣近所の人たちのお世話をした後、店に行ってお客様の手助けや自宅への送り届けなどを終え、職場は解散になりました。

その後、両親や弟と船引町で合流して栃木県那須塩原に避難し、馬の蹄鉄師の施設や両親の知人宅にお世話になりました。1か月後、私一人で船引町に戻り、職場で地震の後始末や状況確認をしながら、営業再開に向けた準備をしていました。

谷口さん　地震の時は、茨城県水戸市のゴルフショップに勤務していましたが、福島市に転勤になりました。そこで妻と出会い、妻の両親が小菊の栽培をしていて、繁忙期に少しだけ手伝ったことが、花作りのきっかけになりました。原発事故で川俣町山木屋地区から川俣町内へ避難をしているにも関わらず、小菊作りをしていて、避難してすぐに営農とはすごいな、と思いました。

農業への興味が湧いていたところに、川俣町と近畿大学の連携事業によるアンスリウム栽培者の募集があり、応募。11人が川俣町全域に建てた各々のハウスで切磋琢磨することになりました。熱帯アメリカ原産のアンスリウムは日本国内でもまだ生産が少なく、競争相手も少ないことから、震災後の新しい花き産業としての可能性は大きいと思っています。

▲取材会場となった葛尾村復興交流館「あぜりあ」にて

◆震災後、花作りを始められた経緯や地域への思いと、これからの事業計画などについてお聞かせください

杉下さん　会社員として職場の再開に向けて尽力しつつも、全村避難した生まれ故郷が気に掛かりました。人がいない冬を迎えた景色の無残さを見ながら、葛尾村は地図の上からも消えてしまうのではないか。原発事故という理不尽な災害に義憤を感じながらも、真正面から向き合って何ができることはないかと考え、基幹産業である農業をやろうと思いました。

村が胡蝶蘭栽培にチャレンジする有志を募っていて、その事業計画の精度の高さに共感して応募したことがきっかけです。葉タバコの乾燥ハウス跡地を拠点に、平成29年1月に3軒の農家と1つの法人とで合同会社を立上げました。栽培指導を受けるために千葉県や群馬県、山梨県などに研修に行ったり、花き市場を視察したりしました。

これからは葛尾をはじめ、浜通りに胡蝶蘭栽培の産地形成ができることを目指しています。先ほど話した合同会社は村の事業に取り組むために法人化、3年後には各々が独り立ちすることが前提でした。新型コロナウイルス感染拡大（以下、新型コロナ）の影響で少し遅れていますが、来年度は独立するための準備をします。これまでは仕事を作り、増やすことに取り組んできましたが、波及させていく段階に入ります。

また、アグリカレッジや農業高校などとの連携を図り、村内や浜通り12市町村で次世代の担い手を育てたい。同時に、村の移住定住促進につながるよう、花き栽培が生業として成り立つ環境を作っていきたいですね。

清水さん　私にとって花作りは初めてでしたが、畑のハウスできれいな花を育て、出荷できることはいいなと感じています。初めはトルコギキョウとリンドウでしたが、リンドウの栽培は岩手県が盛んということもあり、トルコギキョウに絞りました。

Jinが法人として花で収益を上げることは当然のことですが、花き農家は決して「きつい・汚い・儲からない」ではないことを伝えながら、花で営農をしたい人を応援したいです。平成27、28年頃から営農の相談を受けたり、職員として受け入れて指導したりしました。来年度は研修制度を導入し、受入れを予定しています。

福塚さん　川内村で3年目を迎え、活動に限界を感じていた頃、復興支援も充実してきましたので、念願のドイツ行きを叶えるために村を離れました。出発に際して村の仲間たちに話した時、「川内に戻ります」って言っちゃったんです。私の正直な思いだったんですね。ドイツには1年滞在した後、東京で学び直して平成30年に村に帰ってきましたが、今はここで生きて行きたい、村の復興を見届けたいと思っています。

30年以降は自宅で教室を開いたり、双葉郡内を営業に回ったりしながら、ファン作りをしてきました。

そして3年目となる今年4月中旬頃に店をオープンする予定です。切り花、園芸、ガーデンを併設する全国でも珍しい広い店になります。

花を軸にしながら、本当にやりたいことを少しずつ形にしたいと思っています。

谷口さん　先の未来の話よりも、アンスリウム栽培に取り組んでいることを通じて、川俣町や福島の良さを、もっと全国に発信していきたいです。

今、新型コロナ禍の影響で外出が難しい家族に向けて、少人数・予約制の観光農園を開こうと、クラウドファンディングに挑戦しています。アンスリウム狩りやイチゴ狩りなど、農業の楽しさを体験して欲しいと思っています。